



中国がわかるシリーズ 35 宋の南遷

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

キタイの支配下にあった東北、ツングース系のジュシェン(女真)族は、渤海の後裔でしたが、完顔阿骨打(太祖)が指導者になると、猛安謀克制(300戸を謀克、10謀克を猛安として、女真族を軍事組織化)を整備し、急速に力をつけて、1115年、大金を建国しました。強大な軍事力の背景には、豊富な鉄資源があったのです。

1122年、宋は、悲願の燕雲16州の回復を狙って、金と対キタイ攻撃を約束しました。キタイの領土を避けて陸路ではなく海路で交渉を行ったので一般にこの同盟のことを「海上の盟」と呼んでいます。1125年、宋と結んだ金軍の南下でキタイは滅び、金は約束通り南の6州を宋に返還しました。キタイの皇族、耶律大石は西走し、東カラ・ハーン朝を滅ぼしてトルキスタンの地に新しくカラ・キタイ(西遼、1132~1211)を建てました。味を占めた宋は、キタイの敗残部隊と連絡を取り、今度は、金を挟撃しようとしたのです。

しかし、この陰謀は露見し、激怒した大金の2代、太宗は、大軍を南下させました。宋は、8代、徽宗(1100~1125)の時代でした。徽宗は、李煜(五代十国時代の南唐の最後の君主)の生まれ変わりと呼ばれるほど、芸術の天分に恵まれた皇帝で、書では、瘦金(徽宗の号)体、画では、翰林図画院を設けて写実的な院体画を開き、風流天子の名をほしいままにしました(わが国に伝えられた徽宗の桃鳩図は、国宝になっています。徽宗は、書家、米芾を寵愛しました)。また、白居易に倣って、南方より大運河を使って庭園を飾る珍しい石や木を運ばせました(花石綱、綱は船団の意味。この流れが、わが国の枯山水の庭園となったのです)。

風流の経費が嵩んだので、蔡京を重用して、重税を課しましたが、その結果として、宋江の乱や方臘の乱が起きました(宋江や蔡京は、水滸伝のモデルとなっています)。もっとも、蔡京には、新法党として、学校や弱者救済施設にも意を用いた側面があり(書にも優れていました)、単なるゴマすりではなかったように思われます。

しかし、徽宗は、芸術家としては超一流であっても、皇帝としてはやはり無能のそしりを免れませ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

んでした。1126年、高麗は金に臣事しました。1127年、開封を落として、華北を征服した金は、徽宗、欽宗(1125～1127)を北方へ拉致しました(靖康の変)。南に逃れた欽宗の弟、康王が南京で即位し、(高宗 1127～1162)宋室を維持しました。これ以降を、南宋と呼びます(以前を北宋とも称します)。領土は半減しましたが、江南の開拓や南海貿易は一層進展し、宋の経済力は翳りをみせることはありませんでした。